

夜なき石と

うなり石 (緒川)

入海神社の鳥居をくぐって石段を登って

くと、途中、右側の石垣に組み込まれたひととき
わ大きな石の前に出ます。この石は、上部が掘
りくぼめられて手洗いとなっており、正面に次
のような文字が刻まれています。

銘 曰

此石在當里

數哦古城裏

怪異傳無取

奉神爲水器

寛延二己巳歳

仲秋 吉旦

「銘に曰く。此の石は、当里にあり。しばしば

古城の裏にうなる。怪異伝わり、取るもの無し。
神に奉り、水器と為す。」

と読むことが出来ます。寛延二年は、西暦一

七四九年で、いまから二百年ほど前、ちよ

うど、江戸時代の中ごろにあたります。

この石は、もとのこの村の古城、すなわち緒



▲ 夜なき石

川城の跡がわじょう あとにあり、そこから、しばしば犬の遠いぬ とおぼえのような悲かなしいなき声こゑをあげました。

「おい、ゆうべ、あの気味きみの悪いなき声こゑを聞き

たかや。」

「聞きいたとも、どうやら、あのなき声こゑは、古城ふじろのほうから聞きこえてくるぞ。」

「なんでも、古城ふじろの草むらにとつもない大石おおいしが二つあって、雨あめの降ふる暗くらくさみしい晩ばんになると、その石いしがなき声こゑを上げるとだそうだ。」

「そりや、お気きの毒どくな最期さいごを遂とげられた、緒川おがわ城主じょうしゅ、水野信元みずののぶもとさまのうらみの声こゑにちがいない。」

「くわばら、くわばら。」

村人むらびとたちは、たがいにうわさしあつては恐おそれ

るばかりで、だれも、その大石を引き取って供養しようとする者はいませんでした。

しかし、ついに、寛延二年という年に、村人が相談しあつて、古城にあつた大石の一つを

かきがら地蔵の境内へ運び、もう一つをここ

入海神社の手洗い石として境内に移し、みんな



でお参りするようになりまして、かきが



▲ うなり石

ら地蔵の方の石を「うなり石」と、入海神社の石を「夜なき石」と呼ぶようになりましたが、もう、あの気味の悪いなき声を聞くことはなくなつたということです。